

---

# 双子の二人「ゼロ」

レイン氷花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

双子の二人「ゼロ」

### 【NZコード】

N3895D

### 【作者名】

レイン冰花

### 【あらすじ】

双子の紅は、貧血持ちの天才。<sup>アオ</sup>蒼は運動神経抜群の妹思い。この二人が揃えば最強！？な、日常？短編「双子の二人」の自己紹介的なシナリオ。

(前書き)

3作? 4作目になるこの作品はあんまり楽しくないと思いますが、みてくれば、大体の意味は分かるはず? だよー?

「お兄ーちゃんーん！」

「」の家の次女、中学生三年生のブラン少女黒花桃は急いでいるのか、息を切らしながら兄を呼ぶ。

「うん~?どうした桃?」

居間から顔を出して尋ねるは、この家の大黒柱、竜栄であり、家中で一番下の位置にいる可哀相な人だ。

「お父さんには用が無いから視界から消える。」

「ひどい!何で最近冷たいの~?」

「ウザいから。」

桃は、かなり冷たい視線を向けながら言つた。

「お~い、じしたの~?」

「あーお姉ちゃん。」

階段から突然出現したのは、桃の姉であり、長男紅と双子の蒼だ。

「お兄ちゃん起きてる?」

「うん？ 起きてるよ？」

「あつがと、お姉ちゃん。」

慌てて桃を摑む。

「紅は今貧血で休んでるよ。」

「え、やつなの。」

「用があるなら聞こえてくよ？」

何か言ひのを迷つていろな。

「なるほど、僕じゃ駄目か。」

「あー、こやつじやなくて、ね？」

「分かつてるよー？」

紅に言いたい気持ちは分かるかい。

「いのんなさい…。」

「お父さんには謝りはしないの元気で謝るの～？」

「ウザイ黙れ。」

「あせまつー。」

「ヒーリド、お兄ちやんはまた貧血で寝てるんだ。」

落ち込んでいる父親を無視して叫ぶ。

「うん、僕の裸を意識しちゃってね。」

「それが原因か。」

「そうだよ？鼻血を盛大にぶつかけてね。」

「いや、それはお姉ちゃんがいけないんじゃ。」

「え～～いつも裸で添寝してるのに。」

「いやだから、発情期のお兄ちゃん」といつては刺激が強過ぎるよー。？」

「あらあら、紅ちゃんは発情期なの？」

桃と蒼の顔が引きつる。

「じゃあ、今年のプレゼントは何が、大人な本にしましょうか？」

でたよ。

「この家で一番危険な思想を持つ人が。

「うふふ 紅ちゃんもそんな歳なのね。」

お母さんーー！

「うふふふふふ」

微笑みながら近付いてくるのは、この家一番の危険人物で、夫ラブで紅に対して過保護な母親、愛花です。

「うふ どんなのが好きなのかなー? 紅ちゃんは。」

メッシュヤニッちを見る!

これは僕達に意見を求めてるのか!?

「えーと、妹ものと、スク水とかだと思つよ。」

「そう?じゃあ桃か蒼にコスプレをせひ一人だけにしまじょうか。」

「ストーップ!」

「妹を襲わせる気ですか!?」

「いえ?違いますよ?ちゃんと

「食べても良いよ?」って言つてから一人にするんですよ?」

「あなたは鬼か。」

「あなたは実の娘を娼婦にする気か!」

「ママー、それはしづきだよ。」

父め、復活したか。

「あらそつゝ大人になる為に必要かと思つたんだけど。」

「まだ早過ぎるよ～。

それよりもアツチで大人になろうよ～。」

「あらあら、甘えんぼさんね。

いらっしゃい、二人で大人になつてこようね～。」

母と父は居間に入つて扉を閉めた。

「朝から良くやるわね～。」

「ふん、仲が良すぎね、あの一人は。」

「桃も紅とあになりたい？」

「な、な、お姉ちゃん！？何て事聞くのー！」

ドタドタドタッバタン！

「うふふ 素直じゃないなあ。」

後ろを振り向いて、微笑む。

「ねえ？紅。」

そこにいたのは、この家の長男紅だった。

「本人抜いて凄い事話してたな。」

「感想は？」

溜息を吐きながら、答える。

「止めて欲しい。」

「同感だね。」

「じゃあ、止めれよ。」

蒼はクスクス笑い、紅の首に両腕を回す。

「おはよっ、紅。」

「おはよっ、蒼。」

蒼は紅に口付けをし、紅は抱き締めて途中で離れないようになる。

「…っ…は…あ…っ…」

それは一人の関係が、双子同士からかけ離れた物という事を物語つていた。

もうこれぐらいでいいか。

「もひ、終わるの？」

残念そうに言葉を紡ぐ。

「ああ、また明日だ。」

「うん、分かつたよ。」

「明日から学校だ。」

「そうだね。」

「どうで、朝飯は？」

「あ…。」

「母…無理か、桃は…桃も駄目か。」

「私が作る？」

「いい、遠慮しておく。」

「そか。」

「口調変わつてゐるわ。」

「あつや。」

「あはははー。」

「クククククー！」

「つして一日は始まる。」

そして、何かが始まつた。

(後書き)

どうですか？感想を書いてくれれば嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3895d/>

双子の二人「ゼロ」

2010年12月22日06時49分発行